意見交換の概要
（平成 30 年 8 月 9 日(木)・東予地方局）

１．愛媛県の人口減少問題への対策について

愛媛県の人口は年々減少していると私も聞いたことがある。私が住んでいる四国中央市の人口減少数を調べてみると、昨年はマイナス 2,774 人であり、松山市の人口が増加から減少に転じたことで、県の全ての市や町で人口減少が起こっている。人口減少は今まさに県全体の問題だと思う。この問題について対策していることが先ほどのお話のほかにあったり、私たち後世にできることがあったらお伺いしたい。

【知事】

本当に根本的に解決するには子どもさんが増えるしかない。昔、一番多いときは１年間に日本人は 270 万人生まれています。270 万人。今、100 万人ぐらいになってしまった。少子化の原因というのは、人それぞれ人生観とか考え方も違うとか、大昔“産めよ増やせよ”という時代があったんだけれども、そういう問題でもない。だから、みんなが子育てしやすい環境を整えていくとか、かゆいところに手が届くような対策を充実させることで促していくのも１つの方法だし。あえて婚活事業をやっているというのは理由があって、僕らの時代はだいたい結婚平均年齢が男女ともに 26 歳ぐらいだった。今は 30 歳ぐらい。ということは、第一子、最初のお子さんを授かる年齢も４つ上がることになる。そうすると、残りの今の年齢とか人生を考えてどうしようかということにもなりかねないので。やっぱり結婚年齢が下がってくると、お子さんの人数が多くなる。それから旦那さんの、今は昔と違って共働きが当たり前だから、旦那さんの家事の参加。イクメンとかよく言われるようになったけれども、これは統計なんだけど、そういうことがある御家庭のお子さんは人数が多いというのが分かって、ここらあたりがヒントではないかなということで調べていくと、若い子たちがなぜ相手に巡り合えないかというアンケートを取ると出会いの機会がないという答えが圧倒的に多かったので、愛媛県では９年前から婚活事業を始めました。

でも、いろいろタイプがあるからね。例えば、出会いはつくっても、ある人は５対５ぐらいだったら自分をアピールできるけど、20 人、30 人になると一言もしゃべれないとか。いや、この人は５対５でも 20 人でも駄目だと。１対１だったら伝えることができるという、キャラクターによって違いがあるので、それを全部今、ビッグデータの中に入れている。ビッグデータの中でコンピュータを使って一番相性が合うのではないかというのをマッチングさせて、それでセッティングするようにしたんです。そしたら本当にカップルの成立率がドカンと上がって、９年間で愛媛県の婚活事業でカップリングできたのが１万 2,000 組です。その中で結婚しましたと報告があったのが 900 組。多分、報告がないカップルもいると思う。もっと実際は多いと思うけど。こういうのも１つの後押しになるかなと思っています。

さっき言ったように紙おむつ事業もそうだし、経済面でのサポートというのも１つの方法だと思うし、各種事業所にもう１つの主力であるイクメン。イクメンというのはどの県でもやっているので面白くないというのでイクボス宣言というのがある。いろいろな県がやっているんだけど。愛媛はイクボスという言葉を使わず“ひめボス”という言葉にしました。家庭のことをちゃんと考える両親であろうと。さらにそこに地域のことも考えて活動しようというのを追加したのがひめボスなんだけど。これを共有してくれる事業所をどんどん増やしていて、そこで実際のアピールとそれぞれの企業ごとの取組み。例えば、残業時間の管理とか、そういうこともやりましょうねという運動を今広げているところです。

もう１つの人口流入については、県外に一度出てしまった愛媛県出身者を中心に、もちろん県出身じゃなくてもいいんだけど、愛媛県に移住してきませんかという呼び掛けをどんどんやって

います。就職のつなぎであるとか、住居の紹介であるとか。こういったところも全部お手伝いして。例えば、農業をやるときは３年間技術指導をやったり、当初の資金の補助もしたり。例えば、子育て世代で空き家に移り住んでくる方は改修費を幾らか補助するというメニューをつくって呼び掛けをしています。東京に案内人、コンシェルジュというのがいて、いつでも相談を受ける体制が取れているんだけれども。一昨年まではだいたい愛媛県に移り住んでくる移住者が 250 人ぐらいだったんだけども、この事業をやってから去年は 1,000 人超えました。ですから、愛媛県は住みやすいところなので、そういう魅力もアピールしながら増やしていきたいと思っています。１回外へ出てしまった学生については、１回ふるさとに戻っておいでと。帰省に。帰省するときに合同就職説明会を用意するから、そこに出席してほしい。そこに出席してくれたら、片道だけの交通費を支給するから、という事業をやって、今、県外の愛媛県出身の学生たちに毎年呼び掛けています。流出の抑止については、これは若い人たちが社会に出るときの進路の選択のときに、地元も１つ考えてもらいたいということであえてやっているんだけれども。今、言ったように東予の３市には有力な企業がたくさんあるんだけど、多分みんな知らないね。なぜかというと、技術があってやっているから、末端の製品をつくっているわけではないので、会社の存在が知られていないんですよ。でも、愛媛県にはすごい技術力の会社がいっぱいあるから、それを中学生とか高校生の多感な時期から知ってくれれば、「社会に出るんだったら俺はこういう道に行こうかな」、「そういえば、うちの地元にあんな企業があったな。その扉もたたいてみようか。」ということで地元で活躍してくれる人材が増えてくると人口減少に歯止めがかかるので、そんなことをやっているのが今の実態です。

２．県の空き家対策について

先ほどお話しの人口減少に関連する問題であるが、近年、空き家の増加が社会問題となっており、総務省のホームページを見たところ、平成 25 年愛媛県は空き家率の高い都道府県第２位に入っていた。愛媛県庁のホームページを見ると空き家対策が行われているが、実際に今行っている対策を具体的に教えていただきい。

【知事】

これはまず、特に松山なんかはどんどん、どんどんマンションが建って、マンションが建つとみんなそっちに移り住んじゃうから。アパートも同じ傾向があって、それで空き家が圧倒的な数増えていることも１つあります。それからもう１つは南予を中心にほかの地域に流出する。南予が一番多いんだけれども、それによっても空き家化していくことが南を中心に多いというところもあります。

ただ、今、時代もどんどん変わってきていることもあって、例えば、愛媛でも若干あるけど、仕事の中身によってはＩＴ化が進んだことによって、どこにいても仕事が可能だという職業が生まれ始めている。例えば、データ入力だったり、データ管理、あるいはデザインであるとか。そういうのは、結局、インターネット環境がしっかりしていれば生業として成立するというところに目をつけて、例えば、このエリアではＩＴ環境のインフラを整備して、そこに興味のある人は集まってください。ついては空き家を提供しますと。空き家の改修費も出しますということで、田舎で最先端の仕事をするというようなライフスタイルもでき始めたので、このあたりは非常にこれから可能性として広がりを見せていくのではないかと思います。

東京に本社を置く大手のＩＴ企業も最初はデータセンターを地方ということをやっていたんだけれども、今、さらにこれをサテライト型のオフィスにして、自宅でネットで結んで仕事してもらうということにシフトし始めているところも出てきました。ということは、ローカルにおいても収入を得て住めるという可能性が生まれてくるので、そこに空き家というものがストックと

してあるならば、うまく活用できる可能性が生まれてくるのではないかなと思います。いずれにしましても、人が来てくれなかったら空き家は埋まることはできないので、さっきの地域を守るというものの最後に言った産業の問題について力を入れていく必要があると思っています。

もう１つある。例えば、しまなみ海道は７年前から世界のサイクリストの聖地にしようという仕掛けをして、今、世界中から自転車乗りが来るようになりました。人が来るということは、そこにビジネスチャンスが生まれる。最初のころはこんな地にサイクリスト来たけど、みんな素通りじゃないかと言っていたけど、それは違うと思う。ここから先は皆さんの努力ですよと。ここにはこんないいものがありますよ。ここにはこんなおいしいものがありますよ、というのを来られた方々にうまく情報発信できれば、キャッチした人たちは必ずそこに寄るんです。で、お金も落とすんです。その努力は皆さんそれぞれがやらないと、寝ていても人が来ると思ったらそんな世の中は甘くない。という話をずっとしていたんです。最近は若い人たちが新しいお店をあの沿道にどんどん建てて、ジェラートの専門店とかケーキ屋さんとか、どんどん新しいお店が行く度に増えていったり。それもまた空き家なんかをよく活用してくれているので、人の来てくれる仕掛けをすることによって、空き家を活用することも可能だと思っています。

３．保育士不足の中子育て環境の充実に向けた政策について

私は、将来、高校を卒業して、大学で資格を取ってから西条市に帰って来て、仕事をしつつ子育てをしながら家族と一緒に生活していきたいと考えているが、家族とそういう話をしたときに、現在私たちが住んでいる西条市は保育士が不足していて、保育園とか幼稚園など受け皿が減ってきていると聞いて、帰って来たときに働きながら安心して子どもを預けられるような環境が整っていないんだろうかと考えた。西条市に限らず県全体でも少子化、人口減少が進んでいると聞いているが、私たちが生まれ育った地域に定住する、戻ってきて生活したいと考えたときに、いろいろな子育て環境の充実に向けて、今後どんな政策を考えられているか。

【知事】

まず、他人の庭はよく見えるという言葉があるんだけれども、例えば、東京なんかはもっとひどくて保育園落ちたとかネットでみんなに流れたときに、本当に待機児童の人数たるやすさまじい数なんです。しかも、物価が高い。収入、所得は高く見えても、なんせ物価が高いから自由に使えるお金は地方で生活することに比べると本当に少ないんですね。それはもう人生観だから、どっちがいいかというのは何とも言えない。人それぞれが決めることだと思うんだけども、だから決して愛媛が特別保育士が少ないからどうなのという話ではない気がして。

というのは、全国的に今、保育士と介護士が足らないんです。人口の関係で。それと、これは国で決めているらしいけどその職業の待遇の問題もあってなかなか人が集まらない。海外で同じようなことが起こっているんだけれども、それはどうするかというと、外国人の方がかなり狙われてきているんですね。

日本で若干はやっているんだけれども、日本の特色はほかの国と違うのは四方が海に囲まれている。どこの外国行ってもだいたい陸続きだから、外国人の方が働きに来てもあまり違和感がないんだけど、日本は工場にならいるかもしれないけども、そういうものを受け入れる社会がまだ成熟していないので、国の政策を見てみると、確かに介護士は、経済連携協定（ＥＰＡ）で呼んでいるんです。これも４年だったのが、今は最長５年になるんだけど、ただし５年でもう帰ってくださいという制度なんですね。もし日本でその経験を生かして介護施設で働きたい場合は試験を受けてください。その試験を通ったら延長が認められて働けるようになるんだけど、この試験が日本語で行われているんです。介護の現場。日常の日本語ができれば問題ないんだけれども、かえって試験の高度な専門単語、用語を含めて、日本語しかやってないんです。

だから、我々がずっと国に言っているのが英語ないしは母国語で知識の問題だから、受験できるように制度を変えるべきではないかと。これは日本語がネックになってみんな落ちちゃう。そこをクリアして、英語や母国語ＯＫにすれば、多分ほとんど通ってしまう。なぜそれをしないかというと、恐らく増やしたくないというところがどこかにあるのではないかなと思う。もうそんな時代ではないので、今検討する方向になりました。

だから、これからアジアを中心とした外国の方が介護現場や保育現場にふえてくるということになると、また様子は変わってくるのではないかと思います。

４．教育施設の空調等環境設備の整備について

７月より暑い日々が続き、熱中症患者も多く病院に搬送されているというニュースが連日報道されている。また、西日本豪雨の被災地の復旧も緊急の課題だと思う。災害が起こったときの避難所として高校の体育館が割り当てられているところも多いと思うが、夏や冬は被災者が快適に過ごせる場所だとは到底思えない。そこで、教育施設の環境設備についてどのような話し合いが進められているか教えていただきたい。

【知事】

そうですね。今、実は愛媛県は耐震化が遅れていたので、こちらにお金を投入せざるを得なかったので、県の場合は高校が範囲。小学校、中学校は市町になるんですけど、空調施設の整備がこれまた遅れている状態にあります。小中学校でいうと、何%、３％ぐらいでほとんどできていない。

（事務局）

もっと、５％です。

【知事】

５％。ただこれは、一番大きな松山市が全然やっていなかったこともあって、今一気に発注しているので、松山市は今年度には全部完了する。そうなると一気に 35%。さらにほかの市も今、手をつけ始めているので、小中学校のエアコン普及率はぐっと上がってくるので、だいぶ環境がよくなってくるかなと思う。

県の公立高校については、まずは申し訳ないんだけれども、特別支援学校。体調に不安があるので、ここを優先して、こちらはすぐに 100%までもっていく予定にしています。ただ、高校の空調設備についてはＰＴＡの皆さんとの関係もあるので、今までやったところ、これからやるところの差が出てくるといろいろな問題が起こるので。今、60%ぐらい？

（事務局）

72.4%。

【知事】

あと 28%ほどの公立高校については、できるだけ 100%に近づくようにどうすればいいかというのを検討していきたいと思っています。

耐震化については、先ほど申し上げましたように５年間で全部完了したので、大きな揺れがきても震度６、７では倒れないという構造にしました。ここは安心してもらっていいと思います。あとは本当にこれから高校は特色を持たせる、高校ごとの特色をどう出していくかという、そんな色彩も強くなってくるのではないかと思います。

例えば、新居浜だったら、新居浜商業だったら何か特色ある？

（参加者）

商業の分野。

【知事】

商業高校だから商業。確か東高なんかはスポーツ分野をつくったり。中予の伊予高校は吹奏楽部に力を入れたり。そういうものに対して学校の魅力づくりの中でいろいろな設備とかの充実というのは県も考えていかないといけないと思っていますので、胸張ってうちの学校はこういうところがいいんだと言えるような学校が、生徒の皆さんのアイデアから生まれてくるといいのではないかと思います。

≪補足説明≫〔教育委員会〕

県内の県立学校等へのエアコンの設置予定は次の通りです。

＜特別支援学校＞

今年度中に、普通教室・特別教室ともにエアコン設置率が 100％となる予定です。

＜高校及び中等教育学校＞

平成30年９月１日現在、普通教室へのエアコン設置率は76.4％で全国32位となっています。

今後、まずは普通教室へのエアコン設置率 100％の早期実現に向け、整備方策を検討しているところです。

＜小中学校＞

平成 30 年９月１日現在、県内小中学校普通教室の空調設置率は 34.1％で全国 30 位となっています。

全国的な猛暑への対策として、文部科学省が今年度「ブロック塀・冷房設備対応臨時特例交付金」を創設しており、市町の教育委員会には、この機会に事業を推進するよう助言・情報提供しているところです。

現時点では普通教室への空調設置が完了していない市町の全てが、空調設置事業を予定しており、県全体での設置率は大きく伸びるものと見込まれます。

５．地元に残って働く人たちへのメリットや待遇を強化することについて

先ほど、知事がおっしゃられていたように高校を卒業して県外に出る人も多いと思うが、僕らの学校では地元に残る人や働く人が大半を占めていて、そういう人たちへのメリットや待遇を強化していくことが、地元の活性化につながるのではないかと考えているが、そのへんはどう考えられているか。

【知事】

そうですね。まず、愛媛県がどういう環境のふるさとなのかというのを知るのも大事なんですね。

例えば、東予地域と南予と中予ではまた違うんだけれども、なぜかというと東予はさっき言ったようにものづくり産業。まさに工業高校。２次産業というのが中心で産業構造が成り立っていますね。南予にいくと農林水産業が大半を占めていて、その中にかんきつ日本一とか、真珠日本一とか、養殖漁業日本一とか、そういった生産力を持っているので。ただ、工場がいっぱいあるわけではなくて、１次産業がかたまっている。中予はどうかというと商業都市。四国最大の人口を抱えて、どちらかというと３次産業が中心で成り立っている。全部特色が違うので、まず産業でそれぞれ違うことがいい企業を生んでいるので、待遇となると企業ごとになってしまうので、まずどんないい企業が、見劣りしない企業があるかというのを知るというのが第一歩だと思うんですね。

愛媛県はデータベースにも載せているんだけど、４年前から“スゴ技データベース”というのをつくって、高校版もつくっているはずなんですけど。例えば新居浜だったら鉄の高い加工技術を持った会社があったり。減速機といって大きな歯車、これをつくっているメーカーなんかに行

くと、ユンボとか建設機械の根っこのところの歯車。減速機をつくっているんだけども。この会社なんかはエンド製品つくっていないから誰も知らないけど、世界に出回っている建設機械に使われている歯車の 35、36%のシェアを持っている会社があります。四国中央市には、サッシの分野ではトップメーカーがあって、例えば東京スカイツリーのサッシは全部四国中央市のそのメーカーが受注してつくっていたり。「えっ」ていうような会社がここだけでも 183 社紹介しているんですけど、あるんですね。ですから、これを知るということがまず第一歩であることが１つ。

それからもう１つは、さっきの話と重複するんだけど人生観。確かに東京は物価が高いから１人あたりの所得は高く数字として出ています。愛媛では東予が一番高いです。大手の企業が多いから。そういう中で、現実性からしたらどうなのか。例えば、東京にいると会社の寮なんかに入れば別だけど、普通にマンションに住んでいたら、駐車場自体借りるのに月４万円かかるわけだ。その金額があれば、例えば、松山だったらマンション借りられる。この差がある。

僕は松山市長やっていたので、松山市のデータは頭に入り込んでいて、県全体というのはなかなか比較しにくいんだけど、例えば、松山市だったら 47 都道府県の県庁所在地の中で物価が２番目に安い。それから住居費は全国一安い。余暇時間が札幌と並んで全国１位。通勤時間は全国の県庁所在地の中で２番目に短い。ということは、それだけ自由に使える時間が人生の中で取れるというのも、最近、特に東京を経験したから思うんだけど、すごい環境だなと。しかも、休みになったとき、確かにディズニーランドはないけれども、それこそ海がある。西日本最高峰の山。山がある、里がある。いろいろなアウトドアのレジャーが体験できる環境が整っているというのも。

例えば西条だったら、スキー場。石鎚山のスキー場なんか、みんなやってないかもしれないけれど、スノーボードのほうが最近多いけども、日帰りできちゃうんだよね。松山からスキーに行こうと思ったら、車で朝７時半ぐらいに家を出れば、もう 10 時には白銀の世界に立っている。ずーっと滑ってカレーでも食って、午後まで滑って、面白かったねって帰ったら４時半には家に帰っている。こんな環境、全国探したってどこにもない。

そういう愛媛県ならではの魅力というのは、意外と灯台もと暗しで知らないので。これも待遇という直接的なものではないけど、働く環境や人生を考える上で大きな要素なのかなと思います。特にものづくり。工業高校だったら、やっぱりさっき言ったように世界と戦っている、世界と競える技術を持った会社がいっぱいあるので、ぜひそこは理解しておいてもらいたいなと思います。

６．７月豪雨災害の被災者の心のケアについて

７月の豪雨災害で私も大洲市にボランティアに行ったが、その際にいろいろ大変なことを経験した。被害に遭った方の家のことをやっていたときに、そのボランティアを取材しようとテレビの取材が入ったが、被害に遭った方が「撮らんとって。」ということを言っていて、元気でやっているけど、精神面や心は傷ついているんだなと思った。

愛媛県として、被害に遭った方の心のケアなどどういうことをしているのかお伺いしたい。

【知事】

特にケアすべきは避難所生活を余儀なくされて、住む場所を失ってしまった方々が今も三百何人生活されている状況。ここが、まず第一ケアですね。それと、子どもたち。こういったところも気を配らなければいけない。産業政策については、どんどんメニューを持って前向きにやっていくと、みんながゴールがあるならば頑張ろうとなるので、メンタルの面でいくとまず避難所と子どもたちというのが一番ケアすべきかなと思っています。

そこで、避難所には県や市町と連携して臨床心理士という資格を持った専門スタッフが巡回したり常駐したりしながらいろいろな相談に乗ったり、あるいはプロなのでちょっとおかしいと思

ったら声をかけて相談に乗るとか、そういうきめ細かい対応を避難所ごとに三百何人も、10 人のところとかいろいろなところがあって、細かく細かくフォローする体制を取っています。子どもたちについては養護教員の先生方が同様に使命を果たしてくれているので、これは避難所での子どもたちも含めて、学校単位でのケア体制というのも気を配っていく必要があるので、今そういったカウンセラーとか相談に乗る人たちの人員を増員して体制強化をしているところです。

7．地域の自治会活動を活性化する方策について

現在私の地域の自治会の世帯数は年々減り続けており、この 10 年間で 20 世帯も減っている。減少の理由としては死去や転居、独居老人の増加などで、自治会員の高齢化と少子化が大きな要因であり、また、仕事や家事、育児、介護で忙しい住民は役員になることを避けるために脱退する会員もいる。以前はスポーツ大会、敬老会、小学生の映画観賞会などの行事があったそうだが、少子高齢化で年々減少し、今現在小学生がいないそうだ。

先ほどの講話で知事がおっしゃったように、県内でも大雨による洪水、土砂災害など大規模災害に見舞われ、深刻な被害に遭うような地域もあった。そのような危機的な状況で、自治会などの共助はとても重要であると思う。新居浜市の自治会でも自主防災組織が数多く設立され、連合自治会として機能をしているところもあるが、私の地域の自治会では、役員の負担を考慮して連合自治会には加入せず、自主防災も自治会だけで運営しているそうである。さらに孤独死の防止や認知症住民の徘徊、生活の見回り、空き家の見回りなど、ますます新たな課題が生まれ、役員の選出が難しくなってきている。

そこで、県として今後の対策をどのようにしたらいいか、また県内問わずほかの地域においていい知恵があったら教えていただきたい。

【知事】

対策の明快な答えはないです。地域ごとに事情が違うので考えられることをやるしかないんだけど。

１つの参考事例として言うと、松山市長をやっていたときに、松山市はもっとひどいです。隣近所のつき合いは全然ないから。例えば、味酒校区というところがあるんだけども、小学校はその味酒小学校だけ。人口は２万人くらいいる。マンションがいっぱい建っているから。２万人いて消防団やりますとやってくれているのは、２万人でその校区の全体の消防団員が何人ぐらいいると思う？

（参加者）

2,000 人。

【知事】

2,000 人。10 名程度。誰もやってくれない。人口は増えている。マンションも。でも、隣近所誰が住んでいるかも知らないし、挨拶もしない。これがどんどん広がってきていてどうすればいいんだろうかということで、作戦を立てました。

まず第一に、今まではそこでも自治会があって、文化祭とか運動会とか子ども会とか行事はやってたんだけど、結局同じ人しか出てこない。いくら声掛けても敷居が高いのか、知らない人ばかりだからというので出てこない。でも、きっかけが生まれると人のつながりが人を呼ぶということになってくるのではないかということで、まずは当時松山市で不審者情報がかなり広がった時期があったので、地域の子どもをみんなで守ろうということで、大人よ立ち上がれってやったら、それだったらやってもいいかなという人が出てきて、そこでまた人のつながりがちょっと広がった。

間髪入れずに次にやったのが、自分たちの命や家族の命を守りましょうということで、今言っ

た自主防災組織。さっきのは子どもパトロールとかそういうのだけど、自主防災組織の呼び掛けをしました。おやっと思ったのが今まで文化祭とかにも出てこなかった人が、家族の命ということになるとちょっと行ってみようかなという人が生まれてくる。ここはかなり広がりがあったんだけど。ちょっと今のケースとは違うけど。この講習受けて、今度運動会出てよとか言ったら、「行ってみますか。」と言ってまた広がってくるという現象が起こる。

その２つをやった上で、条例をつくってしまいました。これはまちづくり基本条例という条例なんだけど、これはかなり批判もありました。そもそも、まちは誰のものかという議論からスタートして、行政のものではない。住民の皆さんのものでしょと。だから、よく市民参加という言葉を聞くと思うけど、市民参加という言葉自体がおかしいという議論をかけたんです。市民参加という言葉が出てくるということは、行政が主体だから皆さん参加してください。我々が主体だから皆さん参加してください。どう考えてもおかしいでしょと。まちは行政のものではない、皆さんのものだからこれは逆だと。市民主体の行政参加というのが本当の姿ではないですかと。ということで条例つくりますとやっていたんです。

その条例というのが、まちというのは誰のものかというのを書いていなくて、それぞれが何を担っていくのかと明記してあって、それを提示したら住民の皆さんから「おい、中村市長、市の仕事を俺たちに押し付けるのか。」って散々怒られた。いや、違うんだと。皆さん一度考えてみてくれと。まちは誰のものなのかということを。主役は誰なのかということを。行政というのは、まさにその主役の皆さんに寄り添って、一緒にやる立場じゃないかと。そこの方法を変えようという話をしました。

その条例が通った後に、この条例に基づいてまちは地域ごとに計画をつくってほしいということで書いたんだけれども、やってみたい地域手を挙げてくださいと呼び掛けたら、１個しか手を挙げてくれなかったんです。どうしようって言うから、もうほかの地域にこれ見よがしにえこひいきしたような姿を見せつけようというので、その地域を手厚く手厚くやった。そしたらほかのまちがそれを見て、「なんでうちの地域は。」って。だってお宅手挙げてないやん、って言ったら、「来年はうちも挙げるよ」ってどんどん、どんどん増えていって、今６割ぐらいがそういう組織ができたんですね。

この組織というのは、実は簡単につくれるものではなくて、つくったらまず２年間かかります。計画をつくるのに。それぞれの地域の皆さんがやると決めたらみんなで集まって、まず我がまちを知ろうという活動から始めたんです。土日になるとみんなで手分けして我が町の散策活動が始まって、うちのまちにはこんなところがあるんだと。こんな課題があるよという情報を町を歩きながらみんなで共有してキャッチしていくんです。それを公民館で大きな画用紙に抜き出して、みんなで情報を共有する。まずまちを知るというところをみんなで。次にこの課題を解決するためには、さらに町を面白くするためにはどんなことをやればいいのか議論していって、そういう議論が煮詰まっていく。そうすると、今度はこれをやるためにはどんな組織をつくったらいいかを議論してもらう。もちろん、主役は市民の皆さんがやるんだけど、そこに大学生とか行政が一緒に入ってアドバイスしたり、一緒にサポートしたり考えたりする作業を２年やるんです。２年やって計画ができると、条件はその計画ができました、もう１つはボスキャラをつくらない。そういうことをやるとボスができてしまう。ボスができるとロクなことがないから、民主的な運営が担保された組織形態ができたか、この２つを確認してお金を出します。この範囲の中で皆さん自由にやってください。自己責任でいいですよと。そのお金で、今年はうちは祭りに力入れたいから祭りのほうに多めに投入しようとか、それは皆さんの責任でどうぞ自由にやってください。これがまちづくり基本条例の制度だったんです。

それができてから、随分変わりました。スポーツ振興とかいろいろな分野で自主裁量でできるようになったので。これも１つのやり方かなと思います。ただ、まちづくりというのは基本的には市町が主体としてやるものだから、県は一律にというわけにはいかないので、自治会等々の議

論は市との間で議論する必要があるのではないかと思います。

ただ、コミュニティというのは本当に大事で、今回の被災された地域で、まだ細かくは分析できていないけれども、普段からコミュニティがしっかりしたところは、みんなが危ないと言って、一軒残さずチェックして全員避難したんです。そこは誰も亡くなっていないです。避難指示や避難勧告が出てもうちは大丈夫と。ほかの人はほかの人でしょという地域でやっぱり災害が起こっています。だから、本当に地域のコミュニティは大事だなと思いますけれども。行政ができないので、本当にこれは一例だけれども、ある川の中に中州があって、これはほかの県から聞いた。ある県で、中州があって古い家が何十軒かあったんですよ。そこは必ずダムの放流で危ないと避難指示出したら、「わしはてこでも動かんと。水来るなら来いや。ここから一歩も動かん。」と全く言うことを聞かない人が２名いらっしゃって。最後は、法律的にはできないけど半ば強制的に連れて行ったと言っていましたけど。まあ、一人一人考え方が違うので、本当に難しいと思います。

ただ、自治会でなり手がいないということを１つ考えたときには、やっぱり楽しそうなところじゃないと人は来ないです。そこは自治会も考えないといけない。自治会に行ったらこんな楽しいこともありますよというのがあったら、人というのは動くのではないかなと思うので、そんな工夫をされたらいいかなと思います。

８．高齢者も参加可能なスポーツイベントの開催について

少子高齢化について、高齢者についてのことも考えないといけないと思う。

今、全国的に高齢者が増えてきていて、愛媛県でも例外ではなく、県の人口の約 30%が 65 歳以上であるという現状にある。今後の予測も増加傾向にあり、高齢者が健康で過ごせる社会づくりが大事だと思う。私は高齢者も参加可能なスポーツイベントをもっと開催することで、高齢者自身の健康増進だけではなく、世代を超えた社会や人々との関わりを深める機会をつくれると思うが、知事はどのような御意見をお持ちか。

【知事】

高齢化社会というのは、これは避けて通れない話なんですけど。長生きできるのはいいことで、医療環境や社会保障制度が実った結果だと思うんだけれども、さっき言ったように人口構造が変わってくると、この制度そのものが崩れ去ることになる。元気なのに、それを活用できない。本当はほかのことをしたいけども一歩が踏み出せない。そういう人たちもたくさんいるので、元気な高齢者が増えれば、例えば医療費も減るし、生きがいも広がっていくということで、ここは特に力を入れているところなんです。

その切り口として考えられるのは、やっぱりスポーツであるとか趣味であるとか、あるいはボランティアであるとか、といったところの充実になるのかなと思っているんですが、そのうちの１つがスポーツであることも間違いないと思っています。

去年、えひめ国体がありました。これは１つのチャンスかなと思ったので、えひめ国体とその後の全国障害者スポーツ大会。この２つを成功に導いた上でどう次につなげていくかというのがテーマでした。国体というのは、実は名乗りを上げてから実現するまでに、18 年の月日がかかっています。本格的に準備をしたのは５年間なんだけれども、このときの準備というのは受け入れ体制の充実や施設の整備、そしてどうせやるなら勝ちたいということで、選手の強化。この３つの視点でいろいろな取組みを５年間繰り返してきました。

障がい者スポーツにおいては種目が違うんだけれども、特にこだわったのは、ほかの県では障がい者スポーツをやるときにめったにこれは使わないだろうということで、特殊なスポーツもあるので、例えばフライングディスクという競技だったり、いろいろな競技があるので、ほとんど

の県ではリースして終わったら返しちゃうというパターンだったけど、愛媛県の場合は全部購入という道を選びました。というのが、障がい者のスポーツの種目は、ものによってはお年寄りでも気楽にできる、挑戦できる種目がたくさんあるんですよね。こういうのは後で広めていくことによって、元気なお年寄りづくりにもつなげられるのではないかなということもあったので、今、その課題というのも追求しています。

もう１つは、本格的にやっている方々にも、今、水泳なんかでも５歳刻みで挑戦できるようになっていますから、マスター水泳とか。マスタースポーツなんかはそういうものなので、幾つになっても挑戦できるような環境があるんだということを知ってもらうために、誘致をした時点で事業が起こります。これは東京オリンピックが２年後にありますけれども、その直後。東京オリンピックが閉幕した翌月ぐらいに愛媛県で日本スポーツマスターズというのをやります。この前の国体が全国から選手、監督、２万 2,000 人ぐらい来ているんだけれども、この大会も関連スポーツイベントを含めると、１万 5,000 人ぐらいの参加者になります。国体の７割ぐらいの規模の大会で、しかも年齢が 35 歳以上。上は 80 歳、90 歳。５歳刻みぐらいでチャレンジできるようになっていて、年を取ってもチャレンジできるんだというのをその大会を通じて多くの県民に知ってもらえたらなと思って、そこで、高齢者のスポーツの裾野を広げていく機会が生まれればいいなと思って、今、準備に入っているところです。

もう１つは、せっかく愛媛県にはしまなみ海道というサイクリングコースがある。今、道具が進歩しているので、自転車でも本当に性能がよくなりました。

この前もしまなみ海道走っていたら、80 歳以上のおじいちゃんががんがん走っていましたし、えーっと思うくらい元気でした。「楽しいんだ、これが。」って言って。海外だと分かるんだけれども、今、例えばこんなジャージ着て、ドロップハンドルとかクロスバイクに乗っている姿を見ると、だいたい日本では若い人が乗る物というイメージが強いと思う。アジアに行ったら 40 歳、50 歳、60 歳の人たちがメイン。もう本当に健康を謳歌して台北の都市なんか 180 キロのサイクリングロードが川沿いに整備されていて、24 時間照明つき。夜中でもがんがん走っているの、お年寄りたちが。そういう環境で病院なんか行っている暇ないんだよという人生を楽しまれている方が多く見られて、実は敷居が低いんだということをまず知ってもらおうじゃないかということで、今、年に２回、概ね 60 歳以上のシニア世代を対象にしたサイクリング教室というのを定期的に開いています。参加された方は「こんなに楽しいの。」と。クロスバイク乗ったら、「え、これ坂道登れるんだ。」ってなって、まあ、６、７割の方は終わった後に自分の自転車購入しています。

愛媛県はさっき言ったようにしまなみ海道という世界のサイクリストの聖地があって、今、すでに全市町を網羅した 26 のコースを専門家の方々につくってもらって、そこに全てブルーのラインを敷いて、迷わずに楽しんで、観光スポットを外すことなく走れる環境を整えています。そのライン上はサイクリングをやる方にとっても迷わずに行ける道標であると同時に、ドライバーの皆さんにとっても青いラインが見えたら、ここは自転車で走る人が多いから気を付けなきゃという安全運転のメッセージにもなるのかなと思っています。さらにそこには、外国人も想定して、お年寄りというわけではないですが、フリーのＷｉ－Ｆｉスポットを整備しています。今、千何百カ所に整備完了しました。沿線沿いにあるコンビニや食堂、レストランに声をかけてサイクルオアシスというネットワークをつくっています。そこのオアシスの看板が建っているところに行くと、空気入れが無料で貸し出されたり、お水を提供してくれたりというサービスをブルーライン上のお店、提携店でやってくれるようになっていまして。最近、そういったところの沿線のお店では、お店の前にサイクリングスタンドを自発的に置くようなお店がどんどん増えているので、そういうのが気楽にできるところが愛媛県なんだとなってきていると思います。

例えば、逆転の発想なんだけど、南予なんかに行くと過疎化が進んでいる。道路は整備されている。人口が減って車が少ない、悩んでいる。いや、それこそ逆転の発想で、道路が整備されて

車が少ないというのはサイクリングに最適や。島に行ったら、島なんか信号も１個もないんだよ。それ、サイクリングに最高や。という活用方法というのは、ちょっとものの角度を変えればいろいろなものが、見えてくることがあるので、そういったことを駆使しながら、サイクリングを含めてスポーツ全般を元気なお年寄りづくりに役立てる道として、考えていきたいと思います。

９．少子化に伴い生徒数が減少する中での工業高校の存在意義について

先ほどの話にもあるとおり、愛媛県の豪雨の被害やこれから起こるであろう南海トラフの地震の大きな被害が県内で予想されると思うが、災害に強いまちづくりが強く進んでいければいいと思っている。地震が起こって崩壊した建物を直すにも、工業の力が必要と思っている。

今の工業もすごく発展しているが、少子化に伴って工業高校の生徒数がどんどん減ってしまうと、地域の工業が衰退して災害に強いまちづくりが実現不可能になってしまうかなと思っている。そのような中で、工業高校の存在意義について、どのように考えているのか教えていただきたい。

【知事】

本当に全体の子どもの数が減っているので、これは本当に高校どこに行くかみんなの選択によるんだけれども。大変な状況になっているところもあるんですね。

でも、その一方でよみがえったところもあって、例えば、長浜高校って南予にあるんだけれども、ここはどんどん生徒が減っていたんですが、ある先生と生徒が何年も前から長浜高校水族館部というのを学校あげてやって、そこの部員の２人が２年前に科学の全国大会で水族館を通じた研究成果が認められて全国で表彰されたんです。さらに日本代表としてアジアまで行ってプレゼンして、３位になった。それがマスコミとかでどんどん取り上げられて、今、あの水族館部に入りたいといって、ほかの地域からどんどん来始めちゃった。あるいはさっき言った伊予高校なんかは吹奏楽部。あの吹奏楽部に入りたいと言って、松山の中学生たちが松山の高校じゃなくて伊予高校に行っているとか。高校の魅力というのが輝いていると、そんな現象が起こるんだなということを感じた。それは県外からも来ていますから。そんな高校がみんなの力で生まれていくと面白いなと思っています。

ただ、工業高校ということで言えば、愛媛県ではさっき言った工業群、しかも面白いものについて。四国中央市、新居浜市、西条市、今治市というのは工業地帯だけれども、どの市も全て産業が違うんですよね。全然違う。四国中央市は紙・パルプだし。人材をみんな欲しがっています。人材。そうすると、例えば、去年、そのニーズに応えようということで、今治には造船コースをつくりました。ですから、地域の産業によって、その特化した研究を担ってもらえる人材育成、そういうコースがうまくマッチングすれば、その出口に働く場が見えているから、そこも集まってくる１つのきっかけになるのではないかなと思うので。

これは教育委員会のほうでやるんだけれども、造船コースが設置されたように愛媛県の産業というものをしっかり分析して、単に工業高校を担っていくという視点ではなく、愛媛県の産業にフィットする。あるいはそういったところで活躍する人材育成という視点を入れた中身の充実というのもやっていくことが１つの方法なのかなと思っています。

10．地域活性化の方法（モノやサービスの販売と観光を中心とした事業展開）について

知事は、先ほど、サービスが２種類あると言われていた。

そのサービスの１つ目の、モノやサービスをつくる人が働くところであるが、そこはこれから 20、30 年で全部無人化されて働くところがなくなっていく。もう１つの観光のほうも、有名なところ、新居浜で言ったら銅山みたいな感じの観光スポットに来ていただくことについて、

高知、徳島、香川から１時間、２時間かけてそういうところに行こうとなるかどうかと考えたら、僕はならない。
　これからの愛媛県の地域活性化は、モノやサービスの販売、人に来ていただく、その２つ以外では不可能なのか。

【知事】
　そうですね。これは経済学の単純な論理なので、方法論としてその２つに集約されるんだけれども、もう１つ今の科学技術の発展というものを考えるとＩＴ関係をフル活用するというのはある。
　ただ、いま１つ、例えば、かつて日本は人件費が上がったので、ものづくり産業が海外にどんどん行き始めた。人の働く場所がなくなってしまうんじゃないか、地域がなくなってしまうんじゃないかという議論があった。実際はそうはならなかった。なぜかというと、例えば、本社で全て、総務から財務から、ものづくりの全部をやっていたから、行ったのは物をつくるというパーツだけ。ものをつくるパーツは中国に行きました。その分の雇用は確かに減ったんです。ところが、海外に展開したことによって、市場が増えて財務の規模が大きくなる、総務の規模が大きくなる。いわばマネジメントをコントロールするスタッフが足らなくなってしまったんです。そうすると、こっちの人材が必要になったので、結果的にはこのものづくりに携わった人をカバーする形で、こちらの本社機能の人材の雇用が発生して、雇用の供給必要数は変わらなかった、むしろ増えた。こういう現象がありました。
　ロボットにしても、例えば、シンガポールなんかに行くと、日本とは全く違った港の風景が目に飛び込んできます。日本の港というのはやたら人がいて荷を降ろすとか、そこにも人が配置されて、船が着く毎に手旗信号を持っている姿が当たり前なんだけども、シンガポールの最先端の港というのは、人がほとんどいないんです。ズラーっと世界中の船が並んでいます。シンガポールというのは中継基地で、そこで降ろされた荷物でシンガポール国内に運ばれるのは３％。あとの 97％は、例えば、アメリカからシンガポールに来て、アフリカ行きに積み替える。積み替える中継基地なんですね。中継基地の機能を持って世界一便利ですよ、安いですよというのを売りにしたんです。船がズラーっと並んでいるけど、30 分で接岸されて出すというルールになっています。全てのやりとりがペーパーレスで、インターネット通信などを利用して、ペーパーレスでオーダーしたり、やりとりする仕組みになっていて、30 分で来て自動的にクレーンがやって来て、クレーンが荷物を上げて、ここは人がいるんだけれどもトラックの運転手がいて、そのトラックに積み込みます。トラックに行くと間違いがないようにバーコードで読み取って、ゲートのところでバーコード読み取って「あなたはこっちのほうに行ってください。」という指示が出て、間違いなく輸送するという、すごいシステム。人なんかおらせんのやなって思ったらとんでもない。あるビルの中にうじゃうじゃ人がいる。そこで全てのコントロールを管理している。しかも事故が起こったときに速やかに対応できるようなメンテナンスする人間というのは必ずいるわけで、そちらのほうはものすごい人がいる。
　だから、機械化が進もうが、工場が海外に移転しようが、そこで全てのことがなくなるわけではないので。ものづくりを機械がやるにしても、ものづくりの知識がなかったら機械に指示が出せないので、やっぱり工業高校の出番があるし。いろいろな組み合わせの中で、物事を見ると答えが見えているのではないかと思います。
　それから、銅山まで来ます。まあ、どういう感覚かは人それぞれだけど、不便なところほど行ってみたいという、世の中には変わった人もたくさんいるので。
　例えば、久万高原町で西日本最高峰の山だから自転車イベントをやろうと８年前に仕掛けをしました。こんな上り坂ばっかりのところで自転車なんかやったって人なんか来るもんかい、とい

うのが最初の地元の反応でした。ともかく、西日本最高峰でええやん、って。やろうよ、やろうよ、って蓋を開けたらやっぱり280人ぐらいは来たんですね。それがいろいろなところでネット、ＳＮＳに拡散されて、「きついよ。」とか「急だった。」とか。ところが、世の中にはおかしな人がいっぱいいて、きつければきついほど来たくなるという人がいっぱいいるわけ。年々、年々増えて、今はここで打ち切りですと800人の大会になっています。もう人気が殺到してしまっているので、今年は800人で打ち止めです。来年またトライしてくださいという大会になりました。

奈良の山の奥に“おやき”という郷土料理があるんです。中にはナスとかきんぴらごぼうとか野沢菜とか入っているんだけど、あえて山の奥で手づくりでやっている会社があるんです。そこはお年寄りだけでつくった会社が運営しています。おじいちゃん、おばあちゃんが運営しているんだけど、輸出までしています。人はまず来ないです。行くのに車で１時間半くらいかかります。でも、あの山奥まで行っておやきを食べたいと。しかも行くと、この前テレビで見たんだけど、90歳ぐらいのおじいちゃんが囲炉裏のところにドカンと座っておやきを焼いている。それがまたインスタ映えする。後ろでは食堂のおばちゃん、おばあちゃんたちが慣れた手つきでおやきの詰め合わせの作業をやっていて、そのあたりはおばあちゃんの営業課というのがあって、このおばあちゃんたちが海外の交渉にまで行っているというね。

そういうのを見ると、東予なんかすごい裕福に見える。僕なんか本当に行くとワクワクする。新居浜だっけ。例えば、西赤石山登ったことある？

（参加者）

ないです。僕、寮生なんで。

【知事】

全然風景見ていると思うけど、僕は３回登ったんだけども、楽しくてね。なぜかというと、東平も楽しいし、西赤石山って日浦登山口というところから登っていくんだけれども、銅山越ってところをまず目指すんですよ。

新居浜はそもそも住友が開発した町なので、かつてはそこに銅山があって、１万人を超える人たちがあの山の中に住んでいたわけだよね。行くと、いろいろなものが見れる。かつてはここに5,000人収容の公会堂がありました。1,000床のベッドを持つ病院がありました。50メートルのプールがありました。当時の写真つきで立て看板があって、こんな山奥にこれだけ多くの人たちが営みをしていたのかというのはワクワクものなんだよね。道を歩いていると、なんかゴツン、ゴツンってするからなんやろねって言ったら、からみ石。からみ石だっけ？要は、製錬をするときに出てくる石の残りがそこら中に転がっていて、銅鉱石の軽いのみたいなんだよね。この石が見られるのはここだけ。そこに登山道に２本の溝がある。これ、何の溝かというと、最初は人が運んでいたんだけど、そのうち牛車を使うようになった。牛が歩いていくんだけど、牛の後ろにリヤカーをつけている。それが外れないように溝を掘ってレールにした。これ、日本で初めてのレールなんだよ。これが日本初のレールかい。山のほうに行くと、穴がある差し込み口があって、ここはダイナマイトの仕掛けの跡とかね。もう、単なる登山道じゃなくて、歴史産業遺産を感じながら登山を楽しめる。

銅山越を越えると、今度はツガザクラという高山植物が生育。ツガザクラというのは、標高2,000メートル以上でしか生育しないものなんだけど、日本で唯一、あそこだけ1,300メートルで生育するツガザクラ。道行く人に、こんにちは、どこから来たんですかって言ったら、「大阪から来ました。」「岡山から来ました。」何で来たのって言ったら、ツガザクラを見に来るツアーっていうのが県外で発売されているらしいね。

さっきの話で灯台もと暗しなんだけど、地元にそれだけの魅力があるということに、ぜひ自信を持ってもらいたい。特に東平なんかも今度は機械工業の地元企業の皆さんが頑張って、機関車を新たに導入すると言っていましたから、僕は東平はまさに東洋のマチュピチュ。遠いからこそ行きたいという魅力的な場所なので、売り方次第によっては十分いいと思います。

当時、市長に申し上げたのが、東平の駐車場には１つ弱点があって、その上に行く道が狭かったのね。狭かったのでマイクロバスでピストン輸送してたの。ところがこのマイクロバスというのは、白ナンバーだった。タクシーみたいな緑ナンバーじゃなくて、白ナンバー。東京の旅行会社に売り込みに行ったときに、いや、ここはめちゃめちゃ面白いと。だから都会の人に東洋のマチュピチュで売りたいと言ったら、「残念ながら知事、白ナンバーは営業の許可を得ていないので、料金取れないので旅行商品に載せられません。」という残念な答えが返ってきました。すぐに帰って新居浜市長に言って、すぐに緑ナンバーの許可を取ってくれと。取れたら旅行商品に東平が載れるようになるんで面白い、と言ったら、すぐ動いてくれて、今全部緑ナンバーになっているんです。それを受けて、東京の旅行会社に全部あたりまして、やってくれました。２年前は、東平が農協観光では送客１位になったんですよ。

だから、郷里で、まだ人は行ったことはない場所なので、むしろそれぞれ地域の西条には西条、四国中央には四国中央、新居浜には新居浜の魅力があるので、ぜひ知ってください。

11. 少人数制の授業の導入による創造性や表現力を高める教育について

僕は高知県の小・中学校で、小規模校の少人数制の授業を受けてきたが、高校になって 40 人クラスの授業になった。やっぱり授業を受けていくにつれて、１回の授業で一人一人の発言の機会がすごく少ないと感じた。発言することで発表する力がついたり、少人数制にすることで友達と議論する時間が増えると思う。将来的にはＩＴというのが導入されて、知識というものが一定におさまって、それをどう表現していくかというのが大事になっていくと思うので、これからは少人数制の授業をどんどん導入して、創造性を高めたり、表現力を高めるという教育をしていったらいいのではないかと思う。

【知事】

少子化に伴って、必然的に今、１クラスの編制が少なくなってきているので。35 人なりということになってくると思うのですが。人数というのは工夫だと思うんだよね。日本の場合は、かつて詰め込み暗記型教育と言われていたけども、要はディベートするとか意見発表する機会をつくっていなかったカリキュラムになっているので、ここらあたりは工夫によって本当に幾らでもできるんじゃないかなと思います。ただ、自動的に人数は少なくなっていくのかなと思います。

それよりも、僕らの時代と皆さんの時代は違うので、何とも言えないけど、例えば僕らの時代はインターネットないわけよ。全然ない。例えばＬＩＮＥとかね。学校でどうなっているか分からないけれども、簡単にやりとりできる。例えば好きな子ができたとするやん。ＬＩＮＥですぐ好きですとか、会いたいですとか言えるけど、僕らの時代は言えないんだよね。黒電話なんだよ。もう決死の覚悟で彼女の家の電話番号にかけて、おやじが出る。そしたら切るわね。相手に意思疎通すらできなかった時代だからね。

そういう時代を生きてきた我々と多分思考は違う。遊びなども違うかな。遊び方も僕ら高校時代外でばっかり遊んでたし。ただ、その分、野を駆け、山を駆けじゃないけど、工夫しながら遊んでた。例えば、陣地取りごっことかだと、見つけにくい基地をつくるとか、長時間待機するには何が必要だとか、相手を罠にかけるにはどうしようとか。アナログの世界の遊びばっかりやっていた。完全にアナログの世界。今はやっぱりパソコンでゲームとか。やる？

（参加者）

はい。

【知事】

やるのね。その時間が多い。遊びの質も違っちゃっているので。１つ言えることは、アナログというのは十進法の世界。１、２、３、４、５、６、７、８、９、10。デジタルの世界というの

は、ゲームもそうだけど、所詮、二進法の世界。全て０と１の組み合わせで成り立っている世界だから、今言ったような思索を深めるということが、あまり育たないので、本当に自分でそういうことをやることによってカバーする必要性というのは個人的には感じます。

もう１つ言えば、新聞なんか読む？読まない？

（参加者）

読みます。

【知事】

読む。じゃあ、読書はする？

（参加者）

読書します。

【知事】

読書する人も減ってきているんだよね。全体的に。漫画は読んで、読書はしないという人も多くなってきているけど。漫画というのは、確かに僕も見るよ、面白いよ、面白いけども、これはデジタルとかアナログじゃないけども、瞬間、瞬間で面白い、悲しい、という体感ができるから楽に楽しく読めるけど、読書というのはまた別の世界で、文字を読みながら自分の中の想像を膨らませていく。例えば情景を浮かべたり、こういうふうな言葉だったらこういうふうにするかな、自分だったら。やっぱり漫画より絶対読書のほうがいいと思う。

読書することによって思索を深めるトレーニングが自然に身についていくから、さっきの授業だけでなく、日常の中でも今言ったようなちょっとした工夫でいろいろなトレーニングができるのではないかと思うので、ぜひ考えてみてください。

12. これから将来を担っていく高校生・中学生に求めることについて

７月の豪雨災害について、何か力になりたいと思って西予市の野村町のほうに個人的にボランティアをさせていただいた。現場の被害は想像していたよりひどく、僕の心も揺れた。そこの地域の大人の方々が尽力されていたが、やはり若い人たちの力が足りないと感じた。

僕自身、今、高校生として何ができるかと考えてボランティアをさせていただいたが、もし自分の地域がこういう被害に遭ったり、南海トラフが起きてとなったときに、今まで中学生、高校生として助けられる側の防災研修や講話を聞いてきたものが、これから 18 歳が成人となって、高校３年生も大人の扱いをされてくると思う。もう助けられる側だけではなくて、助ける側の立場になってくると思うが、避難場所になったときの運営の仕方など、どう対処すればいいのか、助ける側の立場としての話があまり分からないというのがある。

抽象的な言い方になってしまうが、これから将来を担っていく存在である僕たち高校生や中学生に、これから求めていくことやこれからこうあってほしいということはあるか。高校でこういうことを学んで、こういう大人になってほしいという。

【知事】

そうですね。本当にボランティアで現地に入ってくれてどうもありがとう。

高校生ならではのできることもたくさんあるけども、例えば、学園祭とかあるのかな。全校生徒で我が校は義援金を被災地支援ブースなんかをつくって、そこで食べ物売って、その売り上げを義援金にしようとか。そういうことを募って、高校同士でそれを経由して現金を提供する。例えば、野村高校に渡そうとかね。そんな事業をみんなで考えてやるというのもいい被災地支援になると思うし、そんなこともできるかなと思います。そういう活動というのは、本当に後々記憶の中につながれるし、自分の人間形成の中でも大きな力になってくるのではないかと思います。

君らの時代というのは、さっき言ったように僕ら以上に国際化も進んでいるだろうし、大人にな

ってから社会に出るにあたって自立して生きていかなければいけないので。そのときに、人間としての人間力が大事かなと思います。一言では言えないけど、それは思いやりであったり、あるいは教養を磨くことであったり、いろいろな要素があると思うんだけれども、それは自分で人間の力、人間の魅力を高めるにはどうしたらいいかというのが、自分で悩んで考えてやったほうが身につくと思うので、あえて申し上げません。ただ、本当に人間力を高めれば、本当にいい人たちの出会いが増えていくと思う。同じ魅力を持った人が出会うチャンスが増えてくると思う。だから、それを高めていくということを常に磨きながら歩んでいったらいいのではないかなと１つ思います。

もう１点は、これは僕の人生訓でもあるんだけれども、僕は高校のとき皆さんみたいに真面目ではなかったので、一時崩れていました。そこから立ち直ったときに読書に没頭しました。そのときに出合ったのが司馬遼太郎さんの作品で、“竜馬がゆく”という坂本竜馬の一生を描いた小説を読んで、たかだか 32 歳の人生で人間ってここまでのことを成し遂げるんだというふうに驚きを禁じ得なかった。この人の作品はいいなと思って、もう一冊読もうと思って本屋に行って出合ったのが“坂の上の雲”という松山市出身の正岡子規、秋山兄弟が主人公の作品でした。これは日露戦争時代の小説なので、今の価値観とその当時の価値観は全然違うという前提で読まなければいけないけれども、１つ見えたのは、人間とは何か、日本人とは何かという命題だった。

明治の時代というのは、それまで鎖国をしていた徳川時代が長く続いて、外国を意識する人なんかは１人もいなかった。だって、いないもん。だから、その当時は伊予藩。「俺は伊予藩の人間や。」「俺は長州藩。」藩人という意識が大半を占めていた。そこにペリーが黒船を率いてやってきて。たった４杯の蒸気船で日本が大騒ぎになるわけで。そのときに初めて、外国人が来たことによって日本人という意識が芽生えた。ここから日本人という意識が芽生えた。その当時の日本というのは、外国との貿易も遮断とまではいかないけど、絶っていたから、産業力なんかはありゃせん。日本の当時の産業といったら農業と絹ぐらいしかなかった。世界的に見たら貧しい国家。そういう日本人が外国を意識して何を考えたかというと、外国に負けないいい国をつくろうと思ったわけだよね。今の価値観と違うから、当時は外国の侵略を阻止するために、産業もないのに軍を持っちゃったわけね。金がないわけ。極端な話は金がないのに無理をした。久万高原町がプロ野球球団を持つようなことをやっちゃったわけね。財政なんか成り立つはずがない。でも、外国に負けないいい国をつくろうという意識だけは共有して、みんな歯を食いしばっていたわけね。なんでそんなことができたのか謎だった。今、まっぴらごめんだよ。だって、自由はないし質素倹約は当たり前で、そんなことが当たり前の価値観を求めたから。

でも、不思議なことに、その後の歴史と比べて明治の 40 年の歴史というのは、妙に明るいんだよね。なんか希望が世の中にチラホラあるんだよね。その謎を坂の上の雲というのは解いてくれたんだけども。

これはあとがきに書いてあるんだけれども、要は、貧乏国家がただ１点、外国に負けないいい国をつくろうということで、未来を信じて試練を前向きに乗り越えて行くというのが、その青春群像の中で描かれているんだけれども。あとがきを、僕は、つらいときとか悩むときに必ず読み返すんだけれども、こんなことが書いてある。「この物語は滑稽なまでに楽天的な連中の話である。彼らは、そのような時代人の特質として、前のみを見つめて歩く。もし目の前に坂道があり、仰ぎ見る青い天の上に一朶の白い雲が輝いているとするならば、彼らはその雲のみを見つめて、ひたすら坂道を上っていくであろう。」

要はこれ、人生に例えるならば、雲っていうのは目標なんだよね。夢なんだよね。志なんだよね。それが見つけられるかどうかは、人生を充実させるかどうか勝負。それが見えている人は、よっしゃ、あの雲をつかむぞと言って、坂道に一歩踏み出すわけだ。その一歩を踏み出すと坂道だからつらいし、しんどいし、苦しい。でも、あの雲をつかむぞという目標があれば、つらさは生きがいに変わっていく。しんどさはやりがいに変わっていく。苦しさは到達したときの感動に

変えることができる。雲はつかむと消えちゃう。また次の雲を見つける。だから坂の上の雲という題名には、それだけのメッセージが隠されていたんです。

だから、自分探しと最初に言ったけれども、みんなどういう人生歩むかそれぞれ分からないけれども、それぞれが目指すべき雲をぜひ見つけてください。

（参加者）

ぜひその本を読んでみたいと思います。ありがとうございました。